

都市祝祭の現在

—よさこい系祭りの競技化—

内田 忠賢 (奈良女子大学研究院人文科学系)

はじめに

非日常を現出させる祝祭には本来、暴力的なエネルギーが内包されていた。そのため、事故やめ事が起こり、関係者による仲裁や規制が必要な場合が少なくなかった。したがって、非日常を帯びる祝祭を運営する際、安全という日常性に引き寄せた一定のルール(規範)が必要となる。

一方、鑑賞、審美の対象となる祝祭では、出来映えを競うこととなる。造形物、踊りや音楽を比較、評価し、出来映えを序列化するのである。審査員が採点し、優劣を裁定する場合もある。さらに、審査の得点の数値をもとに採点競技化する場合さえある。これは、参加者の意欲を高めるだけでなく、彼らに優劣を納得させる手段となる。同時に、祝祭には不可欠な、観客にとっての楽しみともなる。このような競技化、さらに言えばスポーツ化は、より魅力ある祝祭を生み出す可能性があり、観光とも親和性が高い。しかし、数値化などによる競技化は日常の論理である。

以上のように、祝祭の競技化という問題設定は、非日常を強調してきた従来の祝祭や祭り研究に、視点の大幅な変更を迫ることができる。

小稿では、以上の問題意識¹⁾から、現代社会に現れた「よさこい系」祭り、特に、その元祖ともいべき高知「よさこい祭り」を事例として、都市祝祭における競技化について考察したい。

1 都市祝祭の競技化

都市祝祭の競技化には、いくつかのタイプがあるように思う。事例を挙げながら、整理したい。

競い合う都市祝祭として、博多祇園山笠を挙げることができる。山笠の運行による「櫛田入り」や「追い山」(全コースを走る)の時間を競うが、順位を付けない。しかも、参加チーム(流)は毎年入れ替わりがない。

競わない都市祝祭として、徳島阿波踊りがある。「有

名連」はあるけれど、参加団体に順位は付かない。参加チームの出入り、団体数が多い。団体や個人の踊りの技量は様々だが、男踊り、女踊りの「型」があるため、素人目にも評価がしやすい。

競い合い、かつ競技化に向かう都市祝祭も少なくない。祝祭の「見せる」側面では、他者への誇示、派手さが特徴となる。複数の団体が競い合うことで、祝祭の魅力が高まる。特に、観光資源的な色彩が強い都市祝祭では、ルールを伴う競技化、スポーツ化が伴う。たとえば、青森ねぶた祭りは年々、採点競技化へ進んでいると、民俗学者の阿南透は報告する。

歴史が浅い、市民参加型の都市祝祭、いわゆるイベント祭りでは、行事自体の活性化のため、採点競技化に向かう場合がある。小稿で事例とするよさこい系祭りは、その代表例であろう。

よさこい系祭りは、私自身が30年近く、参与観察(踊り子、スタッフ、イベント運営、審査員ほか)を続けてきた研究対象である。小稿は主に関連資料に記録される事実関係に基づいて論じるが、審査員や踊り子、チームスタッフなどでの私の経験や実感が裏打ちしていることを付け加えておきたい。

2 よさこい系祭りの系譜

鳴子を両手に持ち集団で踊りを競演するよさこい系祭りは、1954年に高知市で市民祭「よさこい祭り」として出発し、1992年の札幌市での模倣(「YOSAKOIソーラン祭り」)をきっかけに、全国各地(800ヶ所以上)、さらに世界各地に伝播した、一説には、「よさこい」の踊り子が全国に200万人以上いるとも言われる、現代社会を代表するイベント群である。

札幌に次いで、1994年に埼玉県朝霞市の市民祭、彩夏祭によさこいが登場し(後に「関八州よさこいフェスタ」に成長)、仙台「みちのくYOSAOKOI祭り」(開始1996年)、佐世保「YOSAKOIさせば祭り」(同

1998年)、名古屋「にっぽんど真ん中まつり」(同1999年)、福岡「ふくこいアジア祭り」(同2000年)、新潟「新潟総おどり」(同2002年)など、大規模なイベント祭りをはじめ、中小規模のイベント祭りとしても、数え切れないほど各地で開催されている。海外では、2000年以降、アジア各地(ベトナム、タイ、インドネシアなど)、ハワイや北米各地では「高知系」のよさこいが、南米(ブラジル、パラグアイ)では「ソーラン系」のよさこいが展開する²⁾。

大部分のよさこい系祭りは、簡単なルール(鳴子を持つ、特定の曲の一部を踊りの音楽に含むなど)を前提とする、市民祭の一部として当初、開催された。札幌での大成功に影響を受け、全国各地へ伝播し、人気が高まった。参加チームが増え、規模が大きくなるにつれ、競技性を高める方向へと進む。表彰する場合も、祭りへの熱意や貢献度に対するものだけでなく、踊りそのものに対する優劣を採点集計する表彰方式へと変化していった。よさこいは「型」がない自由な集団の創作踊りだからこそ、評価の客観性を、審査という形式で担保するのである。賞は名誉、練習の証というだけでなく、また有名・強豪チームとしての認定になる。今や、採点競技として、益々複雑な審査方式を取り始めている。多くの場合、きっかけとなったYOSAKOIソーラン祭りの審査の動向を参考にしている。そのYOSAKOIソーラン祭りでは、様々なスポーツの採点方式を参照しながら(たとえば、審査員全員の採点の最高点、最低点を除外して集計をするなど)、審査の方法を模索している。

このように、よさこい系祭りが採点競技化へと向かう過程や背景について、次章でよさこい系祭りの本来の元祖、高知よさこい祭りを事例に考えてみたい。

話は戻るが、高知よさこい祭りは市民祭の一環として始まった。戦後復興期、全国各都市で始まった、ごくありふれた市民祭である。他の市民祭との違いは、初回こそ様々な出し物がある総花的なイベントであったが、第2回から早くも、踊りだけで勝負する祝祭にしたことである。

第1回目に合わせ創作された「鳴子踊り」は当初から、簡単なルールを与えられていた。①鳴子を両手に持つ、②テーマソング「よさこい鳴子踊り」に合わせ、創作当初の振り付け(正調)で前進しながら踊るだけであった。しかし後に、鳴子踊りの大幅なアレ

ンジが許容され、やがて、踊りの音楽にテーマソングの一部を含めば良いだけのルールに変わっていた。いわば、集団による創作ダンス、ストリートパフォーマンスに変わっていた。

鳴子踊りの人気が高まり、参加チームが増え、規模が大きくなるプロセスで、アレンジの妙を競うようになった。上述したように最初は、参加チームの祭りへの貢献度に対する表彰だったが、現在では、踊りに対する採点集計による表彰、つまり採点競技となっている。

音楽や振り付けのアレンジの妙を競うということは、当初の「正調」という型を崩して構わないということである。「型」がない集団の踊りの競演、比較軸が難しいパフォーマンスに対して優劣を付け、表彰を行うということは難しい。審査という過程を経ていると外部にアピールすることで、表彰への評価の客観性が確保できるのである。審査には客観性を担保する指標があり、点数化さえできる。そこで、採点競技と変化した、高知よさこい祭りは、より客観性を担保すべく、複雑な審査形式を取るようになった。

3 高知よさこい祭りの競技化

「本家」よさこい祭り(高知)の競技化を、より詳しく辿ってみたい。高知よさこい祭りの競技化のプロセスを検討すると、4期に分けることができる。それぞれの時期での特徴に表題を付け、紹介する。検討、引用する資料は、『よさこい祭り30年史』『同40年史』『同50年史』『同60年史(CD-ROM版)』である。なお、「」内は、原資料からの引用文である。()内は、関連する事項を説明した。

また、「本祭」とは、開始当初からの祭りの日程(8月10・11日)、いわゆる本番を指す。前夜祭は本祭の前日、8月9日の夜の披露、後夜祭は本祭の翌日、8月12日の夜の披露を指す。現在、行われている全国大会は後夜祭と同日に開催される。「地方車(じかたしゃ)」とは、音響設備を搭載した自動車(多くの場合、トラック)である。

1) 市民祭の時代【第1期1954~1976年】

地域の戦後復興、商店街の活性化を目的で、商工会議所が始めたよさこい祭りは、さほど競技化を志向していない。両手に持った鳴子を鳴らしながら、正



画像1 (初期の鳴子踊り)³⁾

調に合わせて前進するだけのルールだった。審査は参加団体の貢献度と努力を表彰する意味合いが強かった。せいぜい、観客が踊りの技量を楽しむだけ、踊り子たち各自が「正調」を競い合う程度だった。

競い合う場合も、作曲家、武政英策が創作した「よさこい鳴子踊り」(いわゆる「正調」)を如何に魅力的に踊るかという点にあった。つまり、踊りの「型」があった時代である。踊り子全員が終始、同じ音楽、振付に合わせて踊った。また、衣装も、どの踊り子隊も法被や菅笠を着用し、大きな違いはなかった。

第1回(1954年)「前日の審査結果(「郷土芸能の競演」優秀5団体)も加味して…10団体を選び、優勝旗を授与」

第2回「…鳴子踊り以外の郷土芸能の参加は原則として認めない」「当面は踊りの普及に重点を置いて技術審査は行わず、参加旗を贈って表彰に代える」

第3回「「競演審査」を進歩と努力を刺激するため復活させ、優秀団体を選んで優勝旗を贈る…」

第4回「参加31チーム…いずれもレベルアップして審査は難航する。そこで僅の差で「優秀を逸したチームには「準優秀」を新設して表彰、「個人優秀」も定員の2人にしぼり切れないため6人に増やす」

第5回「晴れの「総合賞」その他は既に決定している。今回は新しく「アイデア賞」が設けられ…」(奨励賞、準優秀賞、優秀個人もある→前年までの「優秀賞」を総合賞とした)。(当初は「優秀団体」(総合賞)、「準優秀団体」「優秀個人」として功績を表彰していた)。

第6回 優秀団体、準優秀団体、優秀個人のみ表彰。テレビで初中継される(全国中継は第9回から)。

第13回(1965年)「祭りをさらに活気づけるため、個人賞とは別にマトイや旗を振る先導役に「先頭賞」を、そして県外から参加した優秀チームには「特別賞」を…」

第16回(1969年)これ以降、「振興会長表彰」が登場する。有料観覧席が設けられた。

第19回「(台風災害を受け)審査制は廃止し、2年連続出場チームには連続優勝旗を、再び参加したチームと初参加のチームには優勝旗を、さらに県外からの参加チームには優勝旗を…」(リストには「連続優秀団体」「優秀団体」「振興会長表彰」が挙げられる)

第20回(1973年)20周年「全チームに優勝旗、20周年記念の楯が…」(功労者表彰、功労団体感謝状など、多数の表彰を行った)。

第21回「表彰の方法…団体についてはこれまで通り「連続優秀」「優秀」にはそれぞれ優勝旗を贈るが、県外から参加した団体にはトロフィーを贈る。個人についても、各競演場で独自に行っているメダル渡しとともに3年以上の連続参加者には別途に、記念メダルを贈って表彰…」

第23回「個人の表彰は各競演場での独自表彰とは別に、5年連続出場者については振興会表彰とする…」

2) アレンジ踊りの時代【第2期 1977～1990年】

国内や海外での「日本の祭り」イベントに、「よさこい鳴子踊り」が出場する中で、踊りや音楽は自由にアレンジするようになった。サンバ調、ロック調の鳴子踊りが現れ、各地で披露するたびに好評となった。この時期、アレンジの妙、オリジナルな振付、音楽、衣装を競い合う雰囲気が醸成された。ただ、高知よさこい祭り自体が、コンテストに舵を切るかは一進一退、市民祭の色彩を維持しながらも、観光資源としての「見せる」演出を模索した時期である。



画像2 (ポスター 1977年)

第30回(1983年)30周年の各種表彰を行う。また、

- 「ミュージック賞」が加わる。
- 第32回「龍馬生誕150年を記念して「龍馬賞」を設ける」(これ以降第35回まで)
- 第36回(1989年)のみ知事賞、市長賞を設けた(市制100周年に合わせた)
- 第37回(会長賞が設けられる)

3) 採点競技へ向かう時代【第3期1991～1997年】

1980年代を通じた踊りの変化、「踊り子隊」の変質が、よさこい祭りを「競技化」に向かわせた。1991年に始まる前夜祭でコンテスト審査が始まる。上記のようにすでに競技化の雰囲気はできていた。競技化に拍車を掛けたのが、札幌YOSAKOIソーラン祭りの開始(1992年)とその全国的影響力である。YOSAKOIソーラン祭りは当初から、コンテストとしてスタートする。

1980年代まで、参加団体は町内会、商店街、あるいは学校単位であり、また地元企業などが社員やその家族の福利厚生の一環として参加してきた。地縁、社縁の集団による参加である。メンバーの人数を揃えるため、参加者にアルバイト代を支払う場合もあったという。しかし、1980年代後半には、参加団体の多くが地縁、社縁とは関係ない任意団体、高知でいう「クラブチーム」へ移行してくる。しかも、団体名が商店街、企業であっても、踊り子の多くは商店街や企業と無関係な「一般募集」に申し込んだ参加者である。参加チームが選択縁の集団へと移行してきた。「一般募集」での参加者は、参加チームに参加料実費を支払う。逆にいえば、各チームは踊り子を獲得すべく、魅力的な振付、音楽、衣装を競い合うようになる。

このような状況の中、参加団体の貢献度と努力を表彰する審査から、コンテストとしての審査に脱皮することとなる。コンテスト化の試みは、1991年に始まる前夜祭においてである。高知商工会議所創立100年に合わせ、採点競技へと踏み込んだのである⁴⁾。

なお、札幌YOSAKOIソーラン祭りでは、高知よさこい祭りのルールを参考にしたもの、独自のルールを設定した。踊りの最初から最後まで鳴子を持つ(鳴らす)必要はなく、また、音楽の「ごく一部」に共通のテーマソング、「ソーラン節」を含めるだけで構わない上、ステージでの競演を重視する(前進だけの踊りでなくて構わない)などのルールである。大学

生主導で運営されたYOSAKOIソーラン祭りは、特に若者に受け入れられ、人気を博す。全国各地に、YOSAKOIソーラン祭りを模倣するイベントが始められるようになった。

第38回 前夜祭が始まり、グランプリ、ヘアメイク賞、ダンステクニック賞、サウンドアレンジ賞、ファッション賞が設けられる。商工会議所創立100周年に合わせる。ただし、本祭は従来どおりの授賞形式のままだった。

第39回(1992年)前夜祭に「準優勝」「コンセプトワーク賞」「エンターテイメント賞」が加わる。本祭に「特別賞」を新設し、YOSAKOIソーランのチームに授与する。

「これは甲乙つけ難い！」と審査員も頭をかかえていたが、結局、グランプリは2年連続で「セントラルグループ」、準グランプリは「ホームラン」に決まった(10・11日の本祭では、「北海道代表よさこいソーランチーム」に特別賞が贈られる。札幌YOSAKOIソーラン祭りが始まる)

第40回 前夜祭ではグランプリ、準グランプリ、審査員特別賞、奨励賞、ダンス大賞、サウンド大賞、ファッション賞)、本祭では会長賞、ミュージック賞、アイデア賞の他、武政英策賞(特別賞)、そして今回のみ知事賞と市長賞を贈る。個人・団体の功労表彰の他、40周年記念デザインコンテストとして、地方車、ハッピー、ヘアファッションの3部門での表彰も行われる。一方、前夜祭では「準グランプリ」「審査員特別賞」「奨励賞」が加わり、「ヘアメイク賞」を中止する。本祭に第40回のみ「知事賞」「市長賞」「武政英策賞」が、以後「審査員特別賞」加わる。後夜祭が始まる。

第42回(1995年)「後夜祭は「受賞チームの踊りを見たい」という観客と「受賞後にもう一度踊りたい」という踊り子の要望にこたえて今回初めて実現…」(なお、本祭で、多くの優秀チームにも表彰を与えるべく、「地区競演場奨励賞」が新設される。)

4) コンテストと有名チームの時代【第4期1998年～現在】

よさこい祭り振興会(高知商工会議所内)の主導に

より、本祭の審査・表彰では、優秀団体、準優秀団体…ではなく、大賞、金賞、銀賞…とコンテスト色を明確にした。台頭した札幌YOSAKOIソーラン祭りを意識し、1999年には、最初からコンテスト形式による全国大会を、本祭翌日に始



画像3 (ポスター 2003年)

めた。いずれも、踊りや音楽などの審査による得点集計によるコンテストである。全国各地で行われる「よさこい系」祭りが始まった街、よさこいの中心は札幌ではなく、高知であるとのアピールから、高知市観光協会が、全国大会をスタートさせた。よさこい発祥の地が札幌だという世間一般の誤解を解く試みである。当初は、武政英策賞（本祭での受賞チーム対象）、優秀賞（高知県外の参加チーム対象）「粋」だけであったが、2004年には優秀賞に「睦（むつみ）」「艶（つや）」「豪」「夢」「ペギー葉山賞」（特別審査員の歌手、ペギー葉山が指名）が加わる。翌2005年には、県外からの参加チームに最優秀賞「輝（かかやき）」を与えるようになり、優秀賞「夢」を外し、「彩（いろどり）」を加えた。その後も、状況に合わせて、賞の種類を少しずつ変え現在に至る⁵⁾。

本祭でも、優秀団体、準優秀団体…ではなく、大賞、金賞、銀賞…というコンテストを鮮明にした名称に変更する。やはり、札幌YOSAKOIソーラン祭りの盛り上がりを意識したコンテストに変貌した。現在では、本部競演場にて、「よさこい大賞」（1チーム）、「金賞」（3チーム）、「銀賞」（3チーム）、審査員特別賞（3チーム）が選ばれる。市内である各競演場でも採点され、その集計をもとに、上記チームを除いたチームから「地区競演場連合会奨励賞」（12チーム）、および地方車の出来映えを評価した「地区競演場連合会地方車奨励賞」（3チーム）が選ばれる。

第45回（1998年）前夜祭に米子市長賞が加わる。本祭では、よさこい大賞1、金賞3、銀賞3、審査員特別賞3、地区競演場連合会奨励賞9、地区競演場連合会地方車奨励賞3（数字は受賞チーム数）の区分となる。本祭に「よさこい大賞」「金賞」「銀賞」

「地区競演場連合会地方車奨励賞」を追加した。

第46回（1999年）前夜祭に姉妹都市の「米子市長賞」が登場する。よさこい全国大会が始まる。全国大会での授賞は当初「武政英策賞」、優秀賞「粋」だけだった。

「後夜祭とともに初の「よさこい全国大会」が…」（前年の資料には「ヨッ、ハッ、ハッ！」という掛け声でポーズを決める「YOSAKOIソーラン調」が増えたのが特徴」とある。）

第50回（2003年）よさこい祭り50周年に合わせ、個人・団体の功労表彰ほか各種表彰する。今回のみ前夜祭「北海道高知県人会会長賞」を設ける。

第51回（2004年）全国大会の優秀賞に「睦」「艶」「豪」「夢」「ペギー葉山賞」を設定する。

第52回（2005年）全国大会に優秀賞「彩」と最優秀賞「輝」を加え、「夢」を除外する。

第55回（2008年）全国大会に、第10回記念の特別賞「翔」を1年限りで設定する。翌年「審査員特別賞」、翌々年「アイデア賞」を設定するが、いずれも第58回に中止する。

第60回（2013年）60周年の各種表彰。前夜祭の表彰をなくす。全国大会に地方車賞「轟」が加わる。

5) 高知よさこい祭りの競技化

以上のように、高知よさこい祭りでの競技化の系譜を辿ると、いくつかの特徴が分かる。初期には、審査・表彰での試行錯誤、融通無碍が分かる。祭りの位置づけを再確認する時期、節目の年に新たな授賞方式を設ける場合が多い。採点競技化という点では、1970年代後半以降、「正調」以外の踊りが大部分となり、踊りの評価が難しくなり、客観的な審査を装える（審査員による）採点制を導入せざるをえなかった面が大きい。審査基準などは非公開だが、審査員の大部分はマスメディア業界の関係者、それに加えて観光関連の人々で構成される。

地元の文化事業を長年、一手に担う高知新聞グループ（高知新聞、RKC高知放送、高新企業など）が仕切るメディアイベントとしての色彩が年々鮮明となり、同時に、よさこい祭りの競技化は観光資源としての評価を高めることとなった。よさこい祭りは事務局（振興会）を高知商工会議所内に置くものの、全国大会は高知市観光協会が主催する。

つまり、よさこい祭りの競技化のステップは、商工会議所や高知市などの周年に合わせ設定され、あるいは、祭り自体のメディアイベントとしての成長に伴うものだった。しかし、最も影響があったのは、札幌YOSAKOIソーラン祭りの開始とその成長、その影響下、全国各地で始まったよさこい系祭りの出現である。

なお、踊りのアレンジを競うようになり、有名強豪チームが出現したことも、よさこい祭りの競技化に伴うものである。ちなみに、現在、前夜祭では踊りのコンテストを行わず、祈願祭および前年度の本祭受賞チームによる競演が行われる。

4 よさこい系祭りの競技化

札幌「YOSAKOIソーラン祭り」は、既にコンテスト形式が始まっていた第38回・高知よさこい祭りの形式を模倣したため、最初から競技化を志向していた。当初は、「YOSA



画像4 (YOSAKOIソーラン祭り、筆者のチームの受賞)

KOIソーラン大賞」 「準YOSAKOIソーラン大賞」などの授賞を設定した。審査形式は毎年、少しずつ変更するが、徐々に複雑なものになっている。現在では、抽選による競演グループ(ブロック)ごとの1次審査により、グループ内の順位を決め(各3位まで公表)、上位10チーム程度の決勝戦(ファイナル)の他、それらに次ぐ10チームほどによるセミファイナルを設け、さらにセミファイナル1位のチームを敗者復活としてファイナルに加える(附図)。参加意欲を高め、観客に対して盛り上げる場面を増やすためである。また、YOSAKOIソーラン祭りでは、審査基準などを詳しく公表していないが、総得点は小数点以下2桁まで公表し、優劣を明らかにする。

各地のよさこい系祭りでは、札幌YOSAKOIソーラン祭り(1992年～)のコンテスト方式を参考にコンテストを取り入れる場合が少なくない。みちのくYOSAKOI祭り(仙台、1996年～)、にっぽんど真ん中祭り(名古屋、1999年～)、YOSAKOI-SORANブラジル大会(サンパウロ、マリンガ、2000年～)など、

列挙に暇がない。

審査基準を詳細に公表するよさこい系祭りもある。たとえば、千葉県銚子市の黒潮よさこい祭りを例にしてみよう⁶⁾。YOSAKOIソーラン祭りの影響を受け始まったよさこい系祭りのひとつである。審査方法もYOSAKOIソーラン祭りを参考に、独自のものを作ってきた。たとえば、HPにて公表された2015年の黒潮よさこい祭り審査では、1次審査にて各グループ(ブロック)ごとに1位を選び、さらに2次審査(ファイナルステージ)にて、グランプリ、準グランプリなどを決める。「作品力」(60点)は、「基本要素」(10点)、「独創性」(30点、翌年は「作品の独創力」)、「調和」(10点、翌年は「作品とテーマの調和」)、「構成技術」(10点)からなる。「演技技能」(20点)は「演技技能」(10点、翌年は「個々の演技技能」)、「群舞技能」(10点)とし、「総合印象」(20点)は「マナー」(10点、翌年は「熱意とマナー」)、「総合的印象」(10点)からなる。合計100点満点とし、審査員の採点を集計した合計の平均点を出すため、1次審査では小数点2桁まで、2次審査では小数点1桁までとする。翌2016年の採点表には注釈が付いており、同点の場合は「作品の独自性」の得点により順位付けする念の入れようである。

市民祭であるべき「よさこい系祭り」の審査をめぐっては、様々な批判がある。高知よさこい祭りでは、さほど批判を耳にしない印象だが、複雑かつ細かい審査基準、審査過程を設けた札幌YOSAKOIソーラン祭りではネット上を含め、一定の批判を目にする⁷⁾。受賞や上位進出を目指すため踊りでの過剰な演出などへの批判である。有力チームと一般市民チームの、参加意欲にも温度差が見られる。各チームへの参加は任意なので、ファイナル審査に残るような有力チームには参加希望者が殺到し、メンバーが集まらない市民チームは離合集散が激しく、市民チーム数も減少している。演舞レベルの向上の動機付けとして、競技化の意義は大きい。しかし、誰でも参加できる市民祭としての雰囲気づくりには困難が伴う。

おわりに

高知よさこい祭りは市民祭(審査等なし)とコンテスト(競技化)の間を揺れ動いている。市民祭、コンテストともに現代社会においては、一定のルール(規範)の下に行われるのが前提である。その中で、なぜ

採点競技化へシフトするのだろうか？

よさこい系祭りの場合は、地域外からの参加者（チーム）が多い。地域の人々だけによる、地域に閉じた祭りとはならない。一方、見せる（魅せる）イベントでなければ地域のイベントとしては失格である。地域活性化につながる観光資源、メディアイベントにするには、競技化（採点を含む）に進むのは必然であろう。

つまり、よさこい系の祭りのうち、大規模なものは観光資源化、メディアイベントの色彩が益々強くなっている。また、中小規模のものは、今後の方向を模索しているように思われる。

なお、よさこい系祭りは観光資源、文化資源として「創られた伝統」への道を進んでいる。2008年に北海道で開催された洞爺湖サミット（G8）では、日本の民俗芸能の代表として、札幌YOSAKOIソーラン祭りの上位常連2チームが、主要先進国首脳の前で、踊りを演舞、披露した。よさこい系祭りの競技化が生んだ社会現象とも考えられる。同時に、よさこい系祭りが大々的に公認された事例として特筆すべきだろう。それは、伝統を持たず、変化しつづけた、よさこいが伝統芸能に仲間入りした瞬間でもあった。

〈資料〉

- よさこい祭り振興会編（1973）『よさこい祭り20年史』同振興会（高知商工会議所内）
- よさこい祭り振興会編（1994）『よさこい祭り同40年史』同振興会
- よさこい祭り振興会編（2004）『よさこい祭り50年史』同振興会
- よさこい祭り振興会編（2015）『よさこい祭り60年史（CD-ROM版）』同振興会

〈注〉

- 1) 筆者たち科研グループ(付記)の共通理解である。
- 2) よさこい系祭りの分類としては、ストリートで優雅に舞い続ける高知系、ステージ上で激しく4分間踊るソーラン系、そして最近では、どまつり系という呼び方も現れた。内容としては、ソーラン系と大差がないが、よさこい系祭りとしては、日本第2位の規模となった名古屋「にっぽんど真ん中まつり」(略称「どまつり」)の影響を受けた祭り

やチーム、どまつり出場を最終目標にしたチームを指すようである。

- 3) 画像1～3は、高知よさこい情報館の展示による。
- 4) 前夜祭でのコンテストは、2012年（第59回よさこい祭り）を最後に廃止される。前夜祭では、当該年の受賞チームではなく、前年の受賞チームが、当該年の踊りを披露するので審査をする意義が弱いためである。前夜祭でのコンテストは最終的に「グランプリ」「準グランプリ」「審査員特別賞」「ダンス賞」「サウンド賞」「ファッション賞」の6種類だった。
- 5) 現在は、県外チームに対し、最優秀賞「輝」、優秀賞「彩」「粋」「睦」「艶」「豪」を、本祭受賞チーム（県外チームも含む場合がある）に対し武政英策賞を、県外チームのうち地方車持ち込みチームに対し地方車賞「轟」を授与している。
- 6) 黒潮よさこい祭りの2015年の採点結果は <http://www.kuroyosa.com/2015shisa.html> による（最終閲覧日2019年11月30日）。以前、閲覧した2016年の採点結果は現在、Web上で確認できなかった。また、2019年の黒潮よさこい祭りのファイナルでの採点結果では、予選得点とファイナル得点の合計点で優劣が決められている（<http://www.kuroyosa.com/> 最終閲覧日は同上）。
- 7) 札幌YOSAKOIソーラン祭りに対する批判として多いのは、騒音や参加者のマナーの悪さである。YOSAKOIソーラン祭りや、その影響下で始まった「よさこい系」祭りでは、演舞時間外のマナーについても審査の参考にする場合が少なくない。たとえば、会場から会場への移動時のマナーが悪いチームは審査対象外にするなどである。

〈参考文献〉

- 阿南透(2000)「審査と表彰」(宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌』青森市)
- 阿南透(2003)「青森ねぶたの現代的変容」国立歴史民俗博物館研究報告10-3
- 阿南透(2015)「条例制定とその後の青森ねぶた祭り」江戸川大学紀要25
- 阿南透(2016)「条例制定」(宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌 増補版』青森市)
- 武政英策(2000)『歌ありてこそ』(私家版、武政春子

- 発行)
- 内田忠賢 (1999) 「都市の新しい祭りと民俗学」日本民俗学 220
- 内田忠賢編 (2003) 『よさこいYOSAKOI学リーディングス』開成出版
- 内田忠賢 (2004) 「民俗研究と地理学」(水内俊雄編『シリーズ人文地理学2 空間の社会地理』朝倉書店)
- 内田忠賢 (2004) 「現代日本におけるダンスフェスティバルの展開」舞踊学 27
- 内田忠賢 (2008) 「よさこい系イベントがもつ都市祝祭の宿命」都市問題 99-1
- 内田忠賢 (2009) 「都市祝祭の変貌」鈴木正崇編『東ア

- ジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会
- 内田忠賢 (2010) 「よさこいをめぐる若者論の現在」(谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探求』岩田書院)
- 内田忠賢 (2013) 「よさこいが生み出すコミュニティ」都市問題 104-9
- 内田忠賢 (2015) 「地球の反対側のYOSAKOIソーラン」まほら 84

付記 小稿は、平成28～30年度科研費15K0310(研究代表者 阿南透・江戸川大学教授)の成果の一部である。小稿の内容は、2018年度日本民俗学会年会(於、駒澤大学)にて発表した。

審査について

YOSAKOIソーラン大賞を決める「本祭審査」のほかにも「U-40大会」や「ジュニアファイナル」など、各審査それぞれに魅力あるチームが登場！審査の行方から目が離せない！！

審査基準 『心動かされ 感動するような演舞・表現であったか』

審査の流れ

●本祭審査

8日(土) 9日(日) 観客投票(携帯電話からの投票)
次ページのQRコードから、携帯投票へアクセスできます。

8日(土) 11:30~ 一次審査 全10ブロック
●対象/審査希望チーム ●会場/大通南北/レド会場

一次審査で各ブロック3位になったチームのうち、もっとも得票数が多かったチーム

各ブロックの2位チーム 計10チーム

各ブロックの1位チーム 計10チーム

9日(日) 16:40頃~ セミファイナル審査
●対象/一次審査各ブロック2位チーム及び観客投票により選出されたチーム(全11チーム)
●会場/大通西5丁目メインステージ(ファイナルステージ第1部内)

ファイナル審査に進出

9日(日) 18:00~ ファイナル審査
●対象/一次審査各ブロック1位チーム及びセミファイナル審査1位チーム(全11チーム)
●会場/大通北/レド会場:18:00~19:10
●会場/大通南/レド会場:19:10~20:00
●会場/大通西5丁目メインステージ(ファイナルステージ第2部内)

『YOSAKOIソーラン大賞』が決定!!

●U-40大会

チーム規模によらず様々なチームにスポットを当て、チームの更なる活性化を図ろうと、40人未満のチームを対象に2014年から始まった大会。

8日(土) 11:30~17:00頃 一次審査(全5ブロック)
●対象/祭りに40人未満で参加するチーム
●会場/一番街会場

1各ブロック 2位チーム

9日(日) 15:50~17:10 二次審査(U-40大賞決定!!)
●対象/一次審査ブロック上位2チーム(計10チーム)
●会場/カナモトホール会場

審査

●ジュニア大会

中学生以下のメンバーで構成されたジュニアチームが大人顔負けの演舞を披露。ジュニア大賞を目指す子どもたちの真剣な表情に注目!!

9日(日) 10:30~12:30 一次審査
●対象/中学生以下で構成されるチーム
●会場/一番街・丸井今井前会場

上位5チーム

9日(日) 15:50頃~ ジュニアファイナル(ジュニア大賞決定!!)
●対象/一次審査による上位5チーム
●会場/大通公園西5丁目ステージ(ファイナルステージ第1部内)

各賞について

YOSAKOIソーラン祭では、ファイナル審査によって決定する「YOSAKOIソーラン大賞」のほか、チームの努力を称える賞がたくさんあります!

本祭審査	U-40大会
ファイナル審査	U-40大会 二次審査
YOSAKOIソーラン大賞	U-40大賞
準YOSAKOIソーラン大賞	準U-40大賞
ファイナル審査優秀賞	U-40大会優秀賞
セミアイナル審査	ジュニア大会
セミアイナル1位	ジュニア大賞
セミアイナル審査優秀賞	準ジュニア大賞
一次審査員賞	ジュニア大会優秀賞
新人賞	
敢闘賞	
地方車賞	
奨励賞	
北海道知事特別賞	

※当日の運行状況などにより、表彰や受賞演舞ができない可能性があります。ご了承ください。

審査員は市民のみさん!

審査の行方を決めるのは、全国から公募で集まった市民審査員のみさん。年齢・性別・職業も様々な約240名の審査員が、真剣な眼差しで演舞を見つめます。

あなたもケータイから祭りの審査に参加しよう!
ケータイ観客投票

YOSAKOIソーラン祭公式サイトでは、観客の皆さんから「もっとも観る人の心を動かし感動を届けたチーム」への投票を受け付けます!投票の結果、一次審査各ブロック3位チームの内もっとも得票数が多いチームがセミアイナル審査に進出。あなたの一票がチームをセミアイナルに導くかも!?

投票期間 2019年6月8日(土)11:30~ 9日(日)10:00
URL <https://www.yosakoi-soran.jp/>

※投票は一人一回のみです。 ※参加チームが投票対象となります。
※投票には携帯電話のメールアドレスが必要です。

附図 YOSAKOIソーラン祭 パンフレット(2019年)による。